

「道徳性」に着目した保幼小連携の在り方に関する研究

A Study about Cooperation between Early Childhood Facilities and Elementary Schools Focusing on “Morality”

森川 敦子・中島 郁美・山本 裕子・濱田 祥子・川上みどり

Atsuko MORIKAWA, Ikumi NAKASHIMA, Yuko YAMAMOTO,

Syoko HAMADA and Midori KAWAKAMI

The purpose of this research was to investigate the awareness and actual status regarding children's morality and better cooperation between early childhood facilities and elementary schools from the perspective of morality education through a questionnaire survey for nursery staff, kindergarten teachers, and elementary school teachers in a single elementary school zone, in order to gain knowledge about the method for continuous education of morality beginning from infancy. As the result of a questionnaire survey to a total of 74 persons in a single elementary school zone (37 nursery staff members, 11 kindergarten teachers, and 26 elementary school teachers), we learned the following three points regarding cooperation between early childhood facilities and elementary schools for supporting morality education in children. (1) It is necessary for nursery staff, elementary school teachers, and the like to have a sense for proactively learning about the differences and common points regarding their opinions on and the necessity of morality in children in transitional periods. (2) It is necessary to clarify the morality to be nurtured and the ideal image of children to be aimed for in each elementary school zone, as well as the specific means to achieve that. (3) It is necessary to establish specific methods of cooperation and considerations involved in the education of morality in children with special needs.

1 問題と目的

近年、小学校に入学したばかりの1年生が①集団行動がとれない ②授業中に座ってられない ③教師の話を聞かないなどの学校生活に馴染めない状態、いわゆる「小1プロブレム」の問題関心から、就学前施設と小学校の連携の必要性が盛んに論じられている⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾。東京都教育委員会の調査⁽⁵⁾によれば、こうした「小1プロブレム」の発生率は、入学当初の4月に最も多く71.8%となっている。そして、その後の11月時点でも56.7%の学校において、年度初めの不適応状況が収まっていないと指摘されるなど、就学前施設と小学校との接続には未だなお多くの課題があると考えられる。

平成29年に告示された保育所保育指針⁽⁶⁾、幼稚園教育要領⁽⁷⁾、幼保連携型認定こども園教育・保育要領⁽⁸⁾、小学校学習指導要領⁽⁹⁾では、就学前施設と小学校との円滑な接続を図るための連携の必要性が明示された。例えば、幼稚園教育要領には「幼稚園において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続

を図るよう努める」という文章が加わった。保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領にも同様の記載がある。また、小学校学習指導要領第1章総則に「学校段階等間の接続」が新設され、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫する」という文章が加えられた。つまり、保幼小連携の必要性はこれまで以上に高まっているといえよう。

とりわけ今回の改訂では、近年深刻化しているいじめ、荒れ、自殺等の教育問題を受けて、小中学校では新たに道徳が教科化され、より実効性の高い道徳教育の推進が目指されている⁽⁴⁰⁾。また、就学前教育で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として示されている10項目のうち、「道徳性・規範意識の芽生え」、「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「社会生活との関わり」の5項目は、いずれも道徳性に深く関わる内容となっている。このように子どもの道徳性の育成は、就学前施設と小学校との連携においても、重要な課題といえる。

本研究の目的は、幼児期からの連続的な道徳性の育成方法への示唆を得るために、1小学校区の保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を対象とした質問紙調査を通して、子どもの道徳性に関する意識や実態を明らかにし、道徳性の育成から見たよりよい保幼小連携の在り方について検討することである。

2 方法

(1) 対象者

H市立D小学校区にあるA保育所の保育士18名、B保育所の保育士19名、C幼稚園の幼稚園教諭11名、D小学校の小学校教諭26名の計74名。

(2) D小学校区と保幼小連携の実態

D小学校区はH市の中心部に位置する商業施設と住宅施設の混じった地域である。学区内には大規模な公園、文化交流施設、スポーツセンター、博物館等の公共施設があり、文化的にも恵まれた地域である。

D小学校区の就学前施設としては2保育所、1幼稚園の3施設がある。例年、D小学校区では、子ども相互の交流として、「小学1年生が年長児を招くお話し会」、「小学5年生が年長児を案内する学校案内」、「幼児による小学校学習発表会の参観」などを実施している。また、教職員の交流として、「就学時の連絡会」、「保育参観」、「小学校の授業参観」、「参観後の連絡協議会」、「交流会の前の打ち合わせ」などを行っている。

(3) 調査内容

調査内容は、①貴園（校）ではどのような保幼小連携の取り組みを行っていますか、②接続期の子どもに、道徳性の内容（16項目）は、それぞれどのくらい大切だと思いますか、③道徳性の内容（16項目）は、貴園の年長児が卒園する際（小学校1年生は入学してきた際）それぞれどのくらい身につけていたと思いますか、④保幼小連携を円滑に進めるために必要だと思うことは何ですかの計4項目であった。回答は選択肢形式で求めた。

①は園・学校代表者を対象に、②④⑤は全教諭・保育士を対象に、③は年長児及び小学校1年生担任を対象に実施した。本研究では、調査時期が学習指導要領等の改訂前であることから、調査項目は平成20年告示の小学校学習指導要領⁽¹¹⁾や先行研究⁽¹²⁾をもとに作成した。道徳性に関する16項目の内容については、平成20年度版小学校学習指導要領の第1学年及び第2学年の道徳の内容（16項目）で構成した（表1）。

表1 小学校学習指導要領（平成20年）における道徳の内容（第1学年及び第2学年）

1 主として自分自身に関すること
(1)健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。
(2)自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。
(3)よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進んで行う。
(4)うそをついたりごまかしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。
2 主として他の人の関わりに関すること
(1)気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。
(2)幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。
(3)友達と仲よくし、助け合う。
(4)日ごろ世話になっている人々に感謝する。
3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること
(1)生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ。
(2)身近な自然に親しみ、動植物にやさしい心で接する。
(3)美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。
4 主として集団や社会とのかかわりに関すること
(1)約束や決まりを守り、みんなが使うものを大切にする。
(2)働くことの良さを感じて、みんなのために働く。
(3)父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。
(4)先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。
(5)郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。

(4) 調査時期・手続き

調査時期は2014年7月。質問紙を研究者らが各園（校）に持参し回答後に回収した。

3 結果と考察

(1) 回答者の属性

回答者の年齢は、保育士は20代が13名35%，30代が11名30%，40代が4名11%，50代以上が9名24%，無回答が0名0%であった。幼稚園教諭は20代が7名64%，30代が1名9%，40代が1名9%，50代以上が2名18%，無回答が0名0%であった。小学校教諭は20代が4名15%，30代が5名19%，40代が9名35%，50代以上が6名23%，無回答が2名8%であった（図1）。

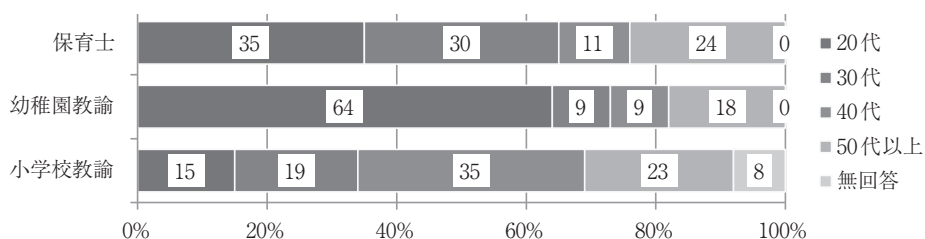


図1 回答者の年齢

回答者の性別は、保育士は男性が1名3%、女性が35名95%、無回答が1名3%であった。幼稚園教諭は男性が0名0%、女性が11名100%、無回答が0名0%であった。小学校教諭は男性が6名23%、女性が18名69%、無回答が2名8%であった。

(2) 保幼小連携の具体的な取り組み内容

保育所、幼稚園、小学校では、具体的にどのような連携を行っているのでしょうか。それを明らかにするため、「貴園（校）ではどのような保幼小連携の取り組みを行っていますか」について、各園校の代表者、計4園（校）の回答を集計した。

保幼小連携の取り組みで多かったのは「交流活動前における打ち合わせ」、「小学校教諭による保育参観」、「保育者による授業参観」、「就学時の連絡会」が4園（校）100%、「特別な支援を必要とする子どもの情報交換」が3園（校）75%であった。少なかったのは「共通のカリキュラムを作成」、「協働による合同の授業づくり」で0園（校）0%であった。

このように、「交流活動前における打ち合わせ」、「小学校教諭による保育参観」、「保育者による授業参観」、「就学時の連絡会」が全ての園・校で行われていることから、参観などを通して互いの保育・教育環境を知ったうえで、交流活動前の打ち合わせや就学時の連絡会といった情報交換を行い、子ども理解を深めようとしていると考えられる。

(3) 接続期の子どもにとって大切だと思う道徳性

次に、接続期の子どもの道徳性について検討した。「接続期の子どもにとって道徳性の内容（16項目）は、それぞれどのくらい大切だと思いますか」について、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭に「おおいに大切」を5点、「やや大切」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまり大切でない」を2点、「全く大切でない」を1点として、5段階の中から1つを選択してもらい、各項目の平均値を求めた。それらを集計し、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭で比較したものが図2である。また、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭別に上位3項目をまとめたものが表2である。

保育士・幼稚園教諭・小学校教諭で共通して得点が高かったのは「友達と仲良くし、助け合う」であった。友達とのよりよいかかわりについては、接続期の子どもに共通して重視されている道徳性だと考えられる。

一方、道徳性の内容(16項目)の中で点数差が大きかった項目は、「身近にいる人に温かい心で接し、親切にする」、「健康や安全に気を付け、規則正しい生活をする」、「日ごろお世話になっている人々に感謝する」などであった。「身近にいる人に温かい心で接し、親切にする」の得点の最大値は幼稚園教諭の5.0点、最小値は小学校教諭の4.35点であった。「健康や安全に気を付け、規則正しい生活をする」の得点の最大値は小学校教諭の4.5点、最小値は保育士と幼稚園教諭の3.91点であった。「日ごろお世話になっている人々に感謝する」の得点の最大値は幼稚園教諭の4.91点、最小値は小学校教諭の4.42点であった。これらのことから、就学前施設では小学校と比較して、接続期の子どもには、他者に親切にすることや感謝するなどの向社会性に関する内容が重視されており、小学校では就学前施設と比較して、嘘をつかないこと、決まりを守るなどの規範意識や規則正しい生活習慣に関する内容が重視されていることが示唆された。

このように、接続期の子どもにとって大切だと思う道徳性については、3者ともに共通するものもあれば、園校種によって違いが見られるものもあるなど、意識の違いがあることが明らかになった。

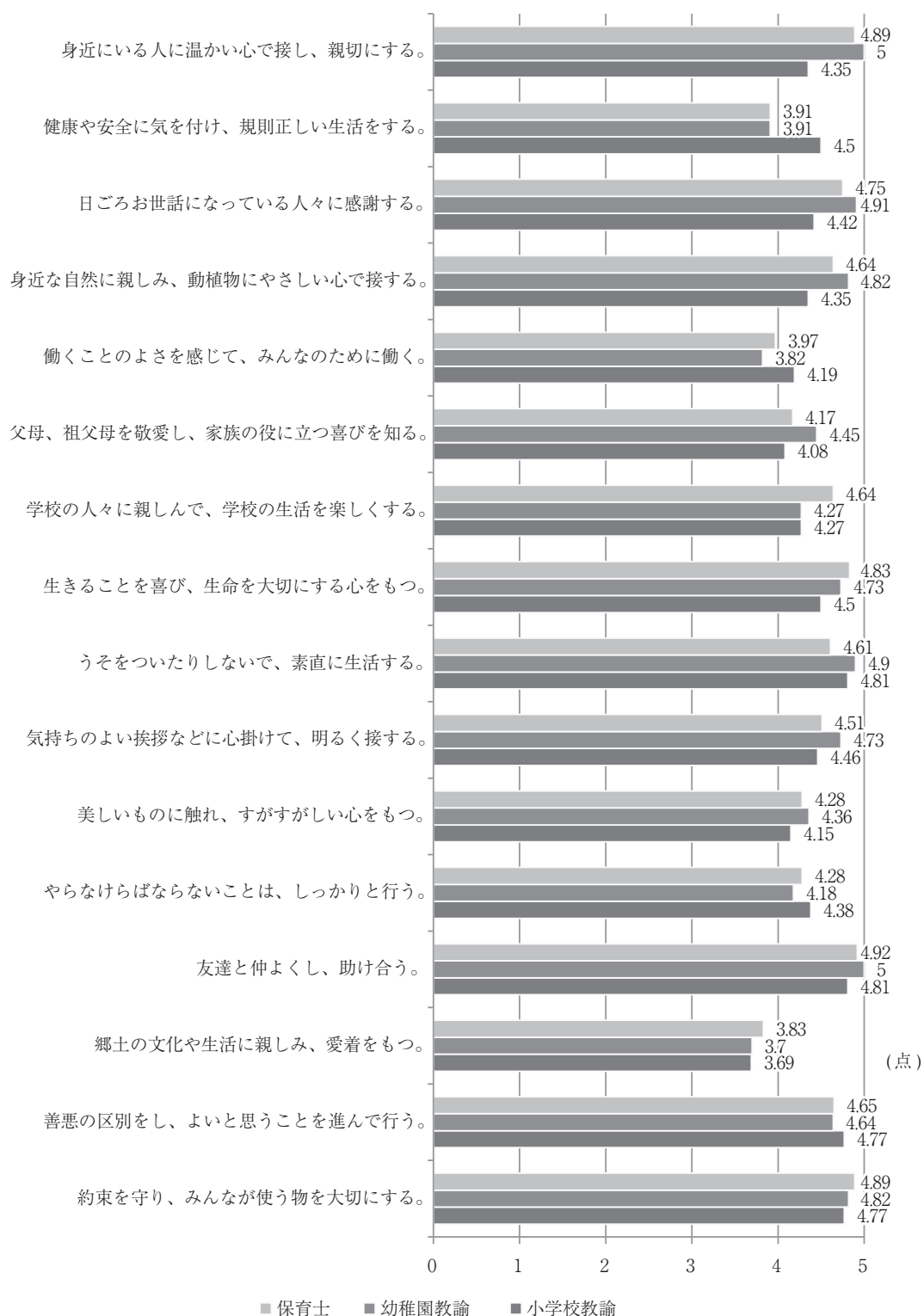


図2 接続期の子どもにとって大切だと思う道徳性（16項目）の内容（保幼小比較、差の大きい順）

表2 接続期の子どもにとって大切だと思う道徳性（16項目）の内容上位3項目

	保育士		幼稚園教諭		小学校教諭	
	1	友達と仲よくし、助け合う。	4.92点	友達と仲よくし、助け合う。	5.0点	うそをついたりしないで、素直に生活する。
2	身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	4.89点	身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	5.0点	友達と仲よくし、助け合う。	4.81点
3	生きることを喜び、生命を大切にすることをもち。	4.83点	日ごろ世話になってる人々に感謝する。	4.91点	約束を守り、みんなが使う物を大切にする。	4.77点

(4) 接続期の子どもに身につけていると思う道徳性

実際に保育士、幼稚園教諭、小学校教諭は、接続期の子どもに対してどのような道徳性がどの程度身につけていると考えているのであろうか。それを明らかにするため、年長児の担任保育士3名及び担任幼稚園教諭3名、1年生の担任小学校教諭3名の計9名を対象に、「卒園時の年長児（入学時の1年生児童）は、道徳性の内容（16項目）がそれぞれどのくらい身につけていたと思いますか」について、「おおいに身につけていた」を5点、「やや身につけていた」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまり身につけていなかった」を2点、「全く身につけていなかった」を1点として5段階の中から1つを選択してもらい、各項目の平均値を求めた。それらを集計し、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭で比較したものが図3である。

道徳性の内容（16項目）の中で得点差が大きかった項目の上位3項目は、「気持ちのよい挨拶などに心掛けて、明るく接する」、「うそをついたりしないで、素直に生活する」、「働くことのよさを感じて、みんなのために働く」であった。「気持ちのよい挨拶などに心掛けて、明るく接する」の最大値は幼稚園教諭（4.33点）、最小値は小学校教諭（2.33点）で2.0点の差があった。「うそをついたりしないで、素直に生活する。」の最大値は幼稚園教諭（4.0点）、最小値は小学校教諭（2.0点）で2.0点の差があった。「働くことのよさを感じて、みんなのために働く。」の最大値は保育士（4.25点）、最小値は小学校教諭（2.67点）で1.58点の差があった。

得点差が小さかった項目の上位3項目は、「生きることを喜び、生命を大切にすることをもち」、「善悪の区別をし、よいと思うことを進んで行う」、「郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもち」であった。「生きることを喜び、生命を大切にすることをもち」の最大値は保育士と幼稚園教諭（4.0点）、最小値は小学校教諭（3.67点）で0.33点の差であった。「善悪の区別をし、よいと思うことを進んで行う」の最大値は保育士・幼稚園教諭の4.0点、最小値は小学校教諭（3.67点）で0.33点の差であった。「郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもち」の最大値は保育士（3.25点）、最小値は小学校教諭（2.67点）で0.58点の差であった。

本設問については、年長児クラスの担任及び小学校1年生のクラス担任の9名のみを対象として調査したため、限定的な結果ともいえるが、多くの項目において、小学校教諭よりも保育士・幼稚園教諭の方が、道徳性が身につけていると感じている割合が高いなど、保育士・幼稚園教諭と小学校教諭とでは、子どもの道徳性を見方に違いがあることが明らかになった。

遊びが生活の中心となっている保育所や幼稚園に比べ、小学校では授業が生活の中心となる。小学校では授業の決まりや学校生活の決まりなど、子どもたちが新たに学ぶ決まりも多くなると考えられる。生活の範囲が広がり、より多くの人との関わりや挨拶などのコミュニケーションも必要となる。これらのことから、小学校では、子どもの道徳性を見る視点や基準が厳しくなってしまうと考えられる。

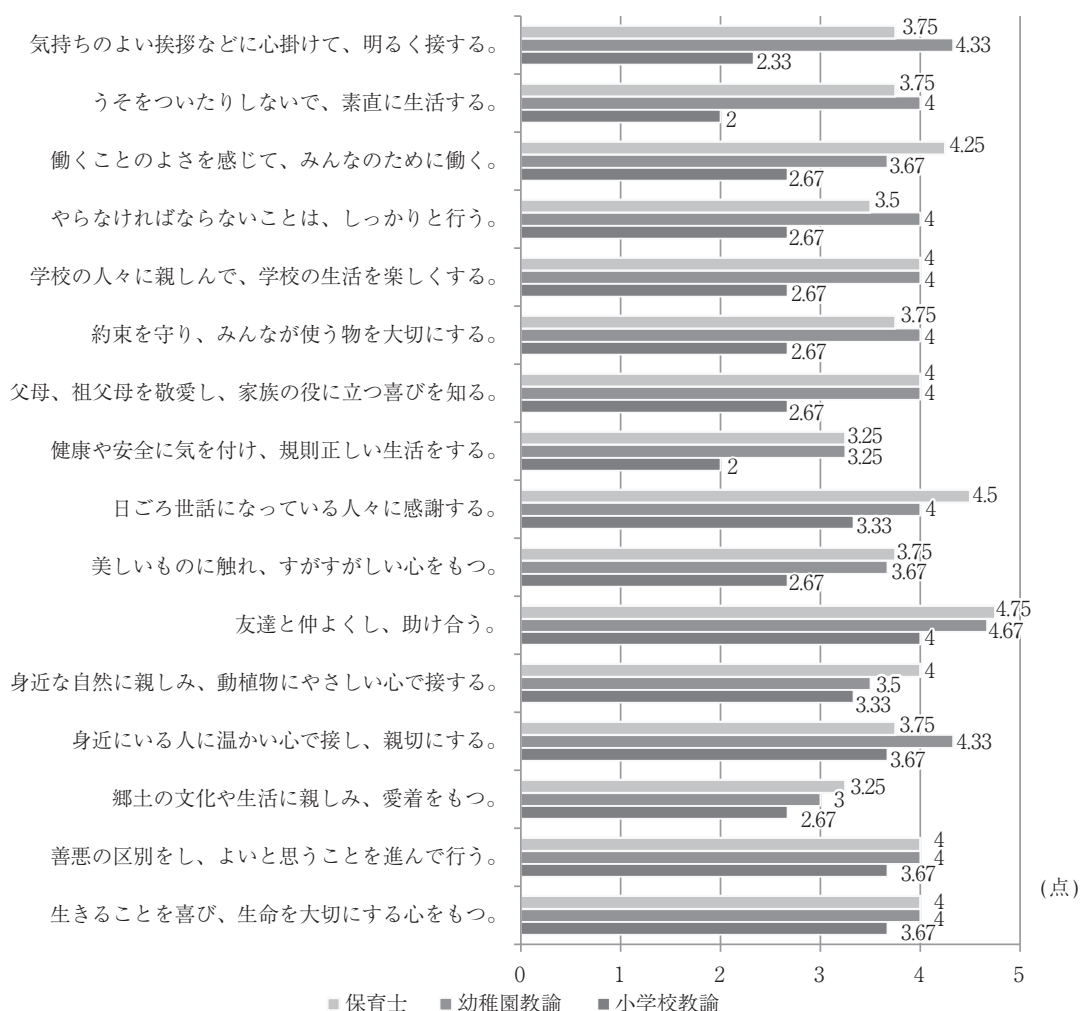


図3 接続期（卒園時・入学時）に身につけていると思う道徳性（保幼小比較、差の大きい順）

また、保育所や幼稚園では、最年長の年長児の姿をモデルとして子どもを見ているのに比べて、小学校教諭は6年生や2年生の姿をモデルとして1年生を見ていると思われる。保育所や幼稚園では身につけているように見える道徳性でも、小学校に入学し小学6年生や2年生と比較されると、不十分に見えてしまうのではないだろうか。このことも、小学校において子どもの見方が厳しくなる要因だと考えられる。さらに、道徳指導について、越中ら¹³⁾が、保育者は「子どもの自主性・主体性」を重視することが多く、小学校教諭は「道徳教育の目標や指導内容を踏まえた価値の伝達」を重視することが多いと指摘しているように、それぞれの道徳指導観の違いにも起因するのではないかと考えられる。

(5) 保幼小連携を円滑に進めるために必要だと思うこと

「保幼小連携を円滑に進めるために必要だと思うこと」については、図4に示す15項目の各内容について、「おおいに必要」を5点、「やや必要」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまり必要

ない」を2点、「全く必要ない」を1点として5段階の中から1つを選択してもらい、各項目の平均値を求めた。それらを集計し、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭で比較したものが図4である。また、各上位3項目をまとめたものが表3である。

「保幼小連携を円滑に進めるために必要だと思うこと」について、3者に共通して得点が高かったのは、「就学時の連絡会」、「特別な支援を必要とする子どもの情報交換」、「保幼小連携に関する打ち合わせ」であった。

得点差が大きかった項目は、「保育課程・教育課程の見直し」と「保育・教育方法について共通理解」であった。「保育課程・教育課程の見直し」は、最大値の幼稚園教諭(4.4点)と最小値の小学校教諭(3.4点)で、1.0点の差があった。また、「保育・教育方法について共通理解」は、最大値の保育士(4.8点)と最小値の小学校教諭(4.0点)とで、0.8点の差があった。

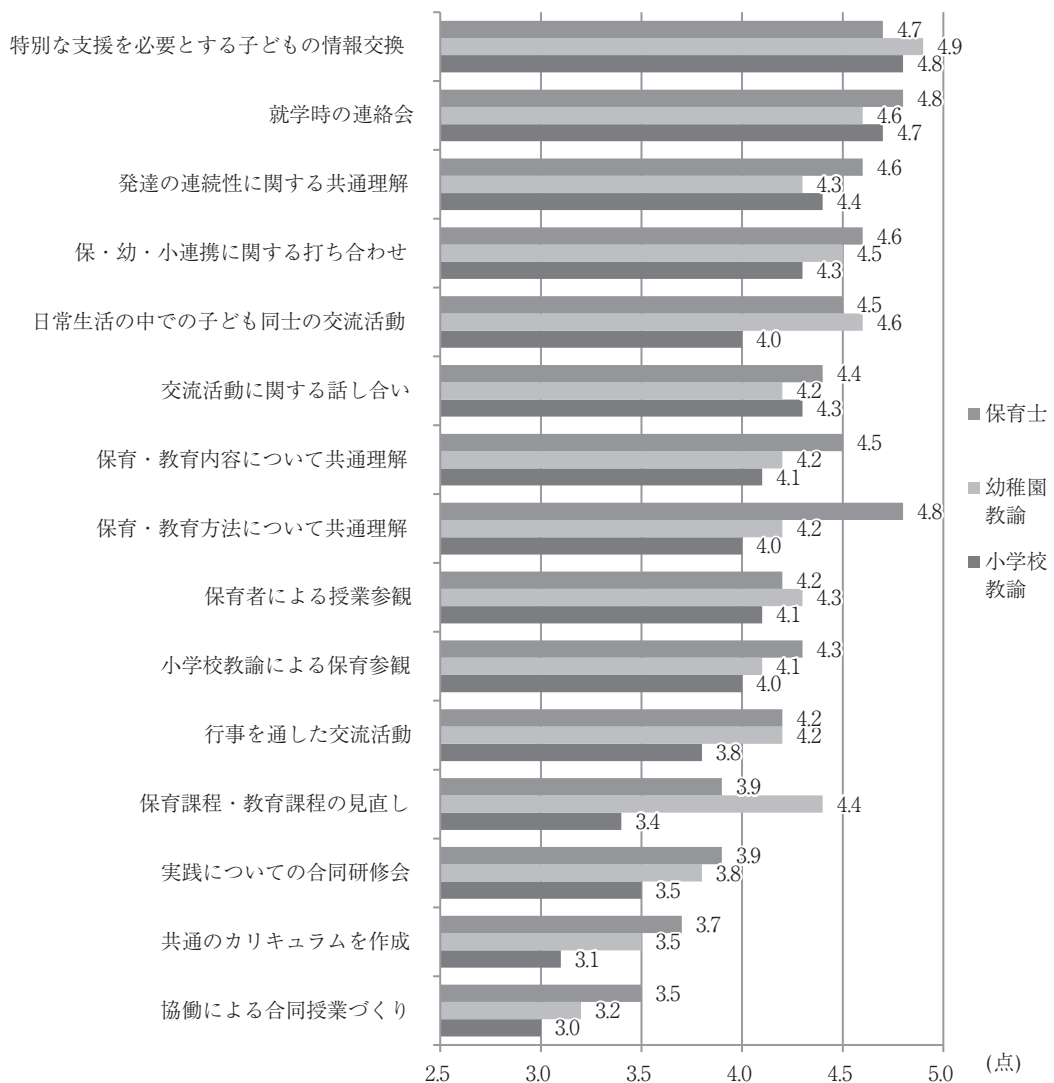


図4 保幼小連携を円滑に進めるために必要だと思うこと（保幼小比較）

表3 保幼小連携を円滑に進めるために必要だと思うこと上位3項目

	保育士		幼稚園教諭		小学校教諭	
1	就学時の連絡会	48点	特別な支援を必要とする子どもの情報交換	49点	特別な支援を必要とする子どもの情報交換	48点
2	特別な支援を必要とする子どもの情報交換	47点	就学時の連絡会	46点	就学時の連絡会	47点
3	発達の連続性に関する共通理解	46点	日常生活の中での子ども同士の交流活動	46点	発達の連続性に関する共通理解	4.4点

これらのことから、連携を円滑に進めるために、特別な支援を必要とする子どもの情報交換や就学時の連絡会をもつことは、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭ともに必要だと考えていることが明らかになった。

一方、幼稚園教諭は、保育士や小学校教諭と比べて、保育課程や教育課程の見直しについて連携の必要性を感じており、保育士は幼稚園教諭や小学校教諭に比べて、保育や教育方法についての共通理解を図る必要性を感じていることが示された。このように連携を円滑に進めるために必要と考える内容にも、園校種による違いがあることが明らかになった。

4 まとめ～保幼小の連携と子どもの道徳性の育成～

本研究の目的は、幼児期からの連続的な「道徳性」の育成方法への示唆を得るために、1小学校区の保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を対象とした質問紙調査を通して、子どもの道徳性に関する意識や実態を明らかにし、道徳性の育成から見たよりよい保幼小連携の在り方について検討することであった。本研究の結果から、幼児期からの連続的な道徳性の育成やそのための保幼小連携の在り方に関して、次の3点が示唆された。

1点目は、まず保育者や小学校教諭は、接続期の子どもの道徳性に関する見方や必要性についての相違点及び共通点を積極的に知ろうとする意識をもつ必要があるということである。本研究から、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭では、同じ時期の子どもに必要な道徳性や身に付いている道徳性について、異なる見方をしている項目があることが示唆された。木下¹⁴⁾や越中ら¹⁵⁾の指摘にもあるように、とりわけ保育者と小学校教諭とでは、異なる点が多く見られた。

一般的に接続期の連携においては、「共通理解を図る」ことが強調されがちであるが、園校種が異なれば違いがあるのは当然である。どちらの見方がよい、悪いではなく、まずはお互いに違いがある、違いがあって当然という考えをもつことが大切だと考える。その上で、幼児期や児童期に育むべき道徳性やその育成方法について、どこに共通点や相違点があるのか、相違点があるとすればそれはなぜ起こるのか、子どもの道徳性の育成については、どのような支援・指導方法が効果的なのか等を明確にしていく必要がある。その際、新小学校学習指導要領の「特別の教科 道徳」において、小学校低学年に新たに追加された「個性の伸長」、「公正公平、社会正義」「国際理解」等の内容についても今後は積極的に検討すべきと考える。また、小学校では道徳教育推進教師を配置することとされている¹⁶⁾。就学前施設と小学校との連携についても、なお一層、道徳教育推進教師のリーダーシップが期待されよう。

2点目は、各小学校区で目指すべき子ども像や育みたい道徳性、そのための具体的な手立てを明確

にすることである。近年各自治体では、就学前施設と小学校及び小学校と中学校との円滑な接続を図るための取り組みが推進されている¹⁷⁾¹⁸⁾。D小学校区においても、毎年自治体の幼保小連携推進事業に基づいた交流や研修が行われている。今後、より効果的な連携にしていくためには、各小学校区で目指すべき子ども像やそのために各年齢段階で育むべき資質や力、支援・指導の方法を明確にするなどの工夫が必要だと考える。この点に関しては、H市の小中連携の取り組みが示唆的である。例えばE中学校区の取り組みでは、「9年間の教育デザインプラン」を作成し、小学校低学年、中学年、高学年、中学校と児童生徒の発達段階ごとに「学習の仕方」、「あいさつ」、「整理整頓」、「時間厳守」、「規範意識」、「言葉遣い」、「基本的な生活習慣」、「他者とのかかわり方」などの具体的な子ども像や内容を一覧にまとめている¹⁹⁾。就学前施設と小学校との連携においても、このような「保育・教育デザインプラン」を作成することを通して、目指すべき子ども像や育みたい道徳性についての理解が深まり、より効果的で円滑な連携が可能になるのではないだろうか。この点については、小中連携も担っている小学校が中心となって取り組みを進めていくことが望ましいと考える。

3点目は、特別な支援を要する子どもの道徳性の育成にかかる配慮や連携方法を確立する必要があることである。本研究では、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭ともに、「特別な支援を必要とする子どもの情報交換」を、今後連携を円滑に進めるために必要だと思うことの上位に挙げていた。発達障害などの特別な支援を要する子どもの道徳性の育成に関しては、専門家会議においても、相手の気持ちを想像することが苦手であることや、望ましいと分かっているにもかかわらずできないことがあるなど、一人一人の障害による学習上の困難さの状況をしっかり踏まえた上で指導や評価を行うことが必要だと指摘されている²⁰⁾。また、障害のある子どもに関する就学前施設と小学校の連携について研究を行った越中・濱田らは、全国的な傾向として公立幼稚園と小学校との連携が取りやすいこと、今後は、公立幼稚園を窓口にして、まずは就学前施設での連携を進めた上で、それを土台にして小学校とつながることが有効だと指摘している²¹⁾。これらの指摘を踏まえながら、各小学校区での連携の在り方についてさらに検討していくことが求められよう。

最後に今後の課題を述べる。本研究は、1つの小学校区を取り上げた研究であった。そのため、本研究の結果にはD小学校区に特徴的なものが含まれている可能性もある。今後は、調査対象を他の小学校区にも広げ、研究の妥当性を高めていきたい。

今回は、小学校学習指導要領の改訂に伴って道徳が教科化されることから、道徳性の育成に視点を当て、保幼小連携の在り方についての実態や課題を明らかにした。今後は、道徳性の育成を中心とした保幼小連携教育の具体的なプログラムを開発し、その効果検証を行うなど、より具体的・実践的な研究を進めていきたい。

注・参考引用文献

1. 新保真紀子『小1 プロブレムの予防とスタートカリキュラム』明治図書、2008年。
2. 社団法人全国幼児教育研究協会『学びと発達の連続性－幼小接続の課題と展望』、チャイルド社、2008年。
3. 後藤栄子・鹿渡よしみ「幼稚園・保育所と小学校の連携の課題について」『東邦学誌第39巻第2号』、2010年、31-47頁。
4. 越中康治・小津草太郎・白石敏行「保育士及び幼稚園教諭と小学校教諭の道徳指導観に関する予備的検討」、『宮城教育大学紀要 第46巻』、2011年、203-211頁。
5. 東京都教育委員会「東京都公立小・中学校における第1学年の児童・生徒の学校生活への適応状況にかかわる実態調査について」

- <http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/soumu/choho/558/page7.htm> (2017/10/20)。
6. 厚生労働省『保育所保育指針 平成29年告示』, 2017年。
 7. 文部科学省『幼稚園教育要領 平成29年告示』, 2017年。
 8. 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領平成29年告示』, 2017年。
 9. 文部科学省『小学校学習指導要領 平成29年告示』, 2017年。
 10. 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』, 2015年。
 11. 文部科学省『小学校学習指導要領 平成20年告示』, 2008年。
 12. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター『幼児教育と小学校教育をつなぐー幼小連携の現状と課題ー』, 2005年。
 13. 越中康治・小津草太郎・白石敏行, 前掲書, 2011年。
 14. 木下光二『育ちと学びをつなげる幼小連携』, チャイルド社, 2010年。
 15. 越中康治・小津草太郎・白石敏行, 前掲書, 2011年。
 16. 文部科学省『小学校学習指導要領 平成29年告示』, 2017年。
 17. 東京都教育委員会, 前掲書,
<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/soumu/choho/558/page7.htm> (2017/10/20)。
 18. 広島市『幼稚園と保育園の連携による就学前教育・保育推進計画』, 2008年。
 19. 森川敦子「第13章 幼少連携, 小中連携」, 鈴木由美子編著『教師教育講座第6巻』, 共同出版, 2014年, 211-225頁。
 20. 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議, 前掲書,
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/___icsFiles/afieldfile/2016/08/15/1375482_2.pdf (2017/10/20)
 21. 越中康治・濱田祥子・朴信永・八島美菜子, 岡花祈一郎・中西さやか・廣瀬真喜子・若林紀乃・松井剛太・山崎晃「障害のある子どもに関する就学前施設と小学校の連携についての実態調査」, 『幼年教育研究年報38』2016年, 103-112頁。

〈キーワード〉

道徳教育, 保幼小連携, 道徳性の発達, 保育学, 保育・教育課程

森川 敦子 (現代文化学部子ども発達教育学科)
 中島 郁美 (学校法人永照寺学園永照幼稚園)
 山本 裕子 (社会福祉法人永照福社会ロータスプリスクール大芝)
 濱田 祥子 (現代文化学部子ども発達教育学科)
 川上みどり (現代文化学部子ども発達教育学科)

(2017. 10. 23 受理)